女たちのまつり

上

宮原昭夫

女たちのまつり

上

宮原昭夫

河出書房新社

宮原昭夫（みやはら　あきお）
一九三一年、横浜生まれ。早稲田大学卒業。一九六六年、「石のニンフ達」で文学界新人賞、一九七三年、「誰かが触った」で芥川賞を受賞する。主な著書に『どったがえしの時点』（毎日新聞社）、『石のニンフ達』（文藝春秋）、『誰かが触った』『どっこいしょ・えいじゃー』『魑魅魍魎』（河出書房新社）、『火と土の巫女』（福武書店）などがある。

女たちのまつり（上）

一九八六年一一月三〇日　初版印刷
一九八六年一二月　五　日　初版発行

著　者　宮原昭夫

発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話　営業　〇三―四〇四―一二〇一
編集　〇三―四〇四―八六一一
振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印　刷　暁印刷株式会社
製　本　小高製本工業株式会社

落丁・落丁本はお取替えいたします

© 1986 Printed in Japan

ISBN4-309-00452-0

目次

ほなみ　5
知里　20
翠　56
ルル　93
向い風　121
難航　146
暗礁　183
再生　206
絆　234
波紋　268

装丁　山根　隆

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

女たちのまつり（上）

ほなみ

「船の上でのパーティーかと思ったら、船を壊して燃すパーティーだったのね。わたくし、まちがえてしまって……」

もちまえの冷静な口調はかわらないが、さすがに眼元にちょっと当惑げな笑みを含んでいる。

真ん中から分けてふっくらと後ろに束ねた髪型のせいで、純日本ふうの優しい顔立ちがいっそう雛人形に似てみえる。眼尻の笑み皺のほかは、すべすべとなめらかな肌。コルセットで整えてはいるのだろうが崩れのみえぬ身体の線。どこか軽快な物腰。

もう初孫さえ生まれている五十代の年頃とはみえぬあでやかな八十川翠は、とりわけ今日は地味なデザインとはいえ、シルクの藍と紫のぼかし染めのワンピース・ドレスをさりげなく着こなし、マリンブルーのキッドの中ヒールで足元をまとめて、いちだんと優雅にみえる。ここに着いた時には胸元に銀色の透し彫りのブローチを留めていたが、さすがにすぐ、そっとはずしてしまった。

ここは白江市の町はずれを流れる白江川の河口の砂浜だ。

いましも数人の男どもが、浜へ曳き揚げた小さな木造の漁船を、鋸や掛矢でしきりにぶち壊している。同じく数人の女たちがビールのケースや食器類、ビニールシートなどを堤防の上の道路に停めたワゴン車から運んで、砂浜に席をしつらえている。壊した木船を燃料にして、ここでバーベキュー・

パーティーをやろうというのだ。
女たちの周りや波打ち際では、子供たちが歓声を上げながら走り回っている。
春の日曜日の昼下がり、晴れたおだやかな河口の突堤で釣り糸を垂れている男女や、河口に架かる橋の通行人たちが、いったい何事かといった面持ちで、この砂浜での騒ぎを見下ろしている。あたりには、潮の香りと河のヘドロの臭いとが入り混じって鼻を衝く。
「だれなの？　こんな野蛮なパーティーに、八十川さんみたいなかたをご招待しちゃったのは」
さっきから翠をどうもてなそうかと、とほうにくれてやきもき気を遣っていた酒井藍子は、冷や汗のにじんだ額を手の甲で拭いながら、桂ほなみにこっそりささやく。
「だってさ、八十川さんから、今日会いたい、ってお電話があったから……例の件の最終的なご返事をなさりたいから、って……」
辛子色のツナギに白のブルゾン、という、六年生の子持ちとは思えぬような服装を、それでもさほどそぐわぬでもなく着こなしているほなみは、タッパウエアのタレにひたしたラム肉を摑み出して金串に刺しながら、くったくのない口調でささやき返す。
「だけど、そのときはもう、このパーティーを予定しちゃってたでしょう。ちょうどいいから、ご一緒しませんか、ってお誘いしたら、いいわ、っておっしゃるから」
「ちっとも、ちょうどよくなんかないじゃないの……」
藍子は顔をしかめて、
「だいいち、今日のパーティーのこと、なんてお知らせしといたのさ？」
「八十川さんに今日のことを？……さあ、なんてお知らせしたっけかな……」
俎板代わりに砂浜に置いた大きなベニヤ板のかたわらに藍子と並んでしゃがみ、金串に肉や野菜を刺しながら、ほなみはあっけらかんと、

「たぶん、白江川の河口で船のパーティーをやりますから、とかなんとか言ったんじゃなかったかな」
長い脚を紺のジーパンに包み、同じ紺の毛糸のベストをワイシャツタイプの白ブラウスの上にまとった藍子は、髪を短く刈り上げていっそう小さくみえる顔をしかめて、うんざりしたように、
「それじゃ、八十川さんが誤解なさったのも無理ないわ。船のパーティー、って言われりゃ、クルーザーのキャビンでのカクテル・パーティーかなんかだと思うのが普通でしょ。みんなでぶち壊した船を燃料にして浜辺でバーベキューをやるパーティーだなんて、誰が思うもんですか」
「そうかなあ。私なんか、キャビンのパーティーなんて招ばれたことがないから、そこまで連想が働かないわよ」
「われわれ庶民と、音楽大学の教授夫人とを一緒にして考えちゃ、だめよ。……とにかく、今日は八十川さんの最終的なご返事がきけるんでしょ。こんなことで心証を悪くして、気が変わったりしないかなあ」
「へーキ、へーキ……」
ほなみはけろりとして、
「八十川さんみたいな上品なかたって、かえってこんな野蛮なパーティーのほうが珍しくっていいんじゃない？　なにしろあのかたは見かけによらずスケールが大きいからね、これしきのことでビクともするもんですか」
藍子は、度しがたい、といった表情で溜息をつき、そっと心配そうに八十川翠のほうをうかがってみる。翠のそのシルクのパーティー着姿は、このヘドロ臭い河口の砂浜ではたしかに異彩を放ちすぎている。
しかし彼女は案外、それで機嫌を悪くしているけはいもなく、かえってそんなトンチンカンな目に

あっている自分を、自分で面白がっているような表情で、あたりを見回している。
その視線がちょうど藍子のそれと行き遭うと、翠は物問いたげににっこり小首をかしげてみせる。
藍子が意味もなくあわててそっちへ立って行くと、翠は笑顔のまま、
「解体してらっしゃるのは、どなたのお船？」
「はい、あのう……」
藍子はかしこまって、
「うちの夫がお友だち四、五人と共同で漁師さんから譲ってもらって船遊びに使ってたんですけど、なにしろもともと中古だったんで、エンジンが磨り減ってダメになっちゃったし、水洩れもひどくなったものですから」
「私の元の夫も、この船の持ち主の一人に入ってたんですけどね……」
ほなみもこっちへ立って来ながら口をはさむ。
「別れてしまってからは、来なくなっちゃったわね」
そんな余計なことまであけすけにしゃべらなくてもよさそうなもんだ、と藍子はハラハラしている。
解体中の小漁船のかたわらで、すでに焚火が盛大に焔と煙を上げている。船体を壊すそばから、その破片が片端から焚火に投げ込まれる。
船の竜骨を鋸でいっしんに挽き切っていた酒井秋司は、息が切れて手を休め、薄くなった額の生え際をタオルでぬぐいながら、誰にともなく、
「船ってヤツは、壊れて欲しくないときにゃ、やたらと壊れるくせに、こうやっていざ壊しにかかると、まったく頑丈で壊れにくいんだよなあ」
汗っかきの秋司は、もう草色のTシャツもグレイのトレーナーのズボンも、水でも浴びたようにぐっしょりだ。彼は、汗を拭き拭き焚火を覗き込んで、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「もうだいぶ燠が出来たよ……」
妻の藍子を大声で呼ぶ。
「そろそろバーベキューにとりかかったら」
「いまブロックでカマドをつくるから」藍子が叫びかえす。
さっきから、しきりと掛矢をふるって船体をこわしていた竹内紀久雄が、手を休めて一息いれたついでに、男の子たちと一緒になって波打ち際を駆け回って金切り声を上げている、ほなみの下の娘に声を掛けている。
「ユリ、カーディガンを脱ぎなさい。汗かいて風邪ひくよ」
「ハーイ」
ユリは素直にピンクのカーディガンを脱いで紀久雄へ渡しに行く。紀久雄はしゃがんでユリのブラウスの袖口をまくりあげてやっている。
「面倒見がいいのねえ」
堤防の上の道路のワゴン車からブロックを抱え下ろして焚火のそばまで運びながら、藍子はそれに眼をとめて、いっしょにブロックを運んでいるほなみをかえりみる。
「うん、ほんとによく世話してくれるのよ」
ほなみも眼を細めてそっちを眺めながら、
「こないだ私が同窓会で遅くなった時なんか、あの人、うちへ来て、子供たちに晩ご飯を作って食べさせてくれたあげく、ちゃんと寝かしつけといてくれたものね」
「あらまあ、うらやましい。それもオノロケの一種だなあ」
藍子はひやかす。
「ほとんど通い夫だわね」

「そうそう、王朝ふうなのよ」
ともなげに受け流して、ほなみはブロックを運んで行く。その彼女のかたわらへ、いましがた着いた堀口玲子がエプロンの紐を結びながら寄ってきて、
「ごめん、遅くなって……」
急に小声になり、
「どう、八十川さんの感触は？　ご返事はイエスらしい？」
「さあ……まだその話題には触れてないのよ。訊くのがこわいみたいで」
ほなみは肩をすくめてみせる。玲子と話しながら歩いて行くと、はしゃいでいる子供たちの群れから一人離れて、ほなみのもう一人の娘、小六の美夏が砂の上に座って何かやっている。通りすがりにその手元をふと覗きこんで、ほなみは、
「やだねえ！」と、とんきょうな声を上げる。
「こんなとこまで問題集なんか持ってくることないでしょ！　こういう時は勉強なんか忘れて、しっかり遊ぶのよ」
ほなみに言われて、美夏はびっくりするほど長いまつげを上げて母を見る。
「だって、遊びなんかより算数のほうが面白いんだもん」
逆おむすび型の顔に、まつげのせいでいっそう眼が大きくみえ、相対的に鼻も口も小ぶりにみえる。
「やだねえ！……」ほなみはまた歎声を上げる。
「いったい誰に似たのかしら？」
美夏はぷっと頬をふくらませ、
「こんな親ってあるかしらね。よそのうちじゃ、お母さんは勉強しろ、勉強しろ、って言うのに」
かたわらで堀口玲子が笑いながら、

「うらやましい話ねえ。私もつくづく、やるなって言われても勉強やるような子がほしいわ」
男たちは、焚火から燻をトタン板でしゃくって、ブロックで囲った中へ移し始める。その上に金網を渡し、女たちが肉や野菜の串や、丸ごとの生イワシや、アルミ箔にくるんだジャガイモなどを、所狭しと乗せると、たちまちタレの焦げる香ばしい匂いがあたりに拡がる。
それに魅かれて、いままで砂浜を駆け回って騒いでいた子供たちが、たちまち周りに集まってくる。
「はやく、はやく」
「はらへった、はらへった」
一人が急きたてると、面白半分にみんながそれに和し、しばらくはバーベキューの周りは耳を聾するような騒ぎだ。
「さきに子供たちにあてがっちゃいましょう。バーベキュー第一弾は、子供用！　大人のみなさんは、もう少々お待ち下さい！」
ほなみが金切り声で叫ぶ。大人たちは、とりあえず焚火の周りへ移動して、酒井秋司の音頭でビールの紙コップをかかげて乾杯し、亡き愛船の冥福を祈る。
「つづいて、もう一つ……」
秋司は、妻の藍子のほうへ眼くばせをしてみせながら、
「本日、八十川さんから、必ずや、すばらしいご返事がいただけることを祈って」
と、もう一度コップを上げる。
「カンパーイ」
みんな、口々に叫んでコップを口に持って行きながら、その眼の隅から心配そうに八十川翠の表情をうかがう。翠はさりげなくほほえんで軽く会釈しただけだ。
バーベキューの第二弾が焼き上がると、やっと大人たちは、夢中で食べている子供たちの車座の隣

に、もう一つの車座を作り、
「サーいよいよ食うゾー」
ほなみが陽気な声を上げる。
「やだねー、お母さんは！　はしたない声を張り上げて！」
子供たちの車座の中から美夏が叫ぶ。ほなみは首をすくめて、
「なんだか小姑といっしょに暮らしてるような気がするわ。なにかと口うるさくってさ」
「あんたんとこは、お姉ちゃんがしっかりしてるから、いいわねえ……」
と玲子が笑いながら、
「うちなんか甘ったれでまるでダメ」
「親がしっかりしてないと、子供がしっかりするみたいよ」藍子が茶々を入れる。
しばらくは、みんな賑やかにさんざめきながら、ビールを飲んだりバーベキューをほおばったりしているが、大人たち、特に女たちは、胸に一つ、つかえているものがある感じで、やがて、まるで申し合わせたように、ふといっせいに雑談の途切れる瞬間があった。
少しでも酒が入ると一人ではしゃぎだす、藍子の夫の酒井秋司が、なおもしばらく喋り散らしていたが、だれも相槌を打たなくなったので、おや、という面持ちで口をつぐんで一座を見回す。
一同の視線がうながすように藍子の顔に集まる。それを肌に痛いほど感じながら、
「……ええと、あのう……」
藍子は口ごもって、翠に向き直る。
「あの例のことなんですけど、そのう、今日、八十川さんのご返事をきかせていただける、って、うかがったんですけど」
「そう……」

翠は、手に持った紙コップをそっとかたわらへ置くと、眼を伏せたまま、ちょっと黙っている。それから、一言ずつ選ぶような口調で、

「……みなさんのお考えは、わたくしにも理解できていると思いますし、全面的に賛成でもありますわ。自分たちの暮らしは自分たちで護らなければならない……いまではもう、家庭の幸福は家庭だけでは護りきれない。ある意味ではわたくしたちは、政治を食べて、政治を燃料にして、政治で洗濯して、政治で子供を通学させて……っていったようなところがありますからね。

それなのに、わたくしたちの生活をいちばんよく知っている主婦の代弁者が、この白江市の議会には一人も居ない。だから、来年の市会議員選挙に、つねづね暮らしを護る問題にとりくんできた主婦たちの仲間から一人、女性の候補者を立てたい、っていうことでしょう？

そうして、その候補者として、わたくしに白羽の矢が立ったわけね。……光栄なことだわ。そんなに買いかぶってくださったことに感謝しなければいけないわね……」

翠は顔を上げて一同を見渡しながら、

「だから、わたくしも、いいかげんな気持ちじゃなしに、真剣に考えてみましたわ。毎日思いかえし、考え直してみました」

言葉を切って、翠はそのまま、一同の背後のあたりに眼を向けている。

ほなみや藍子たちは、かたずをのむような面持ちで、翠の次の言葉を待っている。ところが、そのまま翠はなかなか口を開かない。いぶかしげに一同が彼女の形のいい口元に眼をあてていると、それが、ためらいがちに開いて、

「……あの、よろしいのかしら、履物やお盆なんかが、流れ出しそうになっていますけど」

ええっ、という感じにみんな一斉にふりかえってみる。砂浜に座っている一同のすぐ背後、ビニールシートの縁近くまで、いつのまにかひたひたと潮が上がって来ていて、子供たちが脱ぎ捨てたサン

ダルや、砂上に置き忘れたプラスチックのお盆などが、既にいくつかぷかぷかと浮いて漂い始めている。

あらあら、たいへんたいへん、はやくはやく、などと一同は総立ちになり、急いで履物を拾い集め、ビニールシートの端を何人かで持って砂浜の上を、波打ち際から堤防の裾のあたりまで曳きずって行ったり、各自の持ち物をかかえて濡れるおそれのないところへ移したり、てんでにあたふたし始める。

「みなさーん、それぞれ自分のコップとお箸とお皿を自分で持って移動してくださーい」ほなみが叫ぶ。

ひとしきり続いた混乱がやっと収まって、新しい場所に敷き直したシートの上に、一同が再び車座になって腰を落ち着ける。かかえてきたお皿やコップにバーベキュー料理やビールなどを盛り直したりする作業も一段落したところで、酒井藍子は、もう待ちきれぬといったように、

「なんだか、とんだハプニングで、話がどっかへ行っちゃったんですけど……」

と口をきる。

「それで、どうなんでしょう、八十川さんのご結論は」

一同は思わずコップや箸を持つ手を止めて耳をそばだてる。翠は、ゆっくりと膝のあたりの砂を払うようなしぐさをしてから、

「わたくしも、まえまえから、どなたか市会議員に立候補してくださる女性がお仲間の中にいらっしゃらないかしら……そうしたら全面的に応援してしまうんだけど、って思っていたのね。……だけど、考えてみたら、そんな〝わたし煽る人、あなた頑張る人〟っていう態度はずるいのよね。こんどみなさんから私に立候補しないか、ってお話があったとき、はじめてわたくし、それに気がついたの」

ほなみや藍子たちの表情がぱっと輝き、思わず互いに眼を見交わして、そっとうなずき合う。

しかし、そこで翠は、ほっ、とかすかに溜息をつくと、にわかにがらりと違う口調になる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c